

一般社団法人日本沖縄政策研究フォーラム

日本精神ここにあり！ 沖縄県祖国復帰秘史

第3回：吉田嗣延編

「沖縄県祖国復帰に復員後の半生かけた男」

平成31年 **3月18**日(月) 昼の部14:00～ 夜の部18:30～

◎場所：IKE○Biz としま産業振興プラザ 3F 男女平等推進センター 研修室2
(旧勤労福祉会館) ◎会場分担金＋資料代＝1,500円

一般社団法人日本沖縄政策研究フォーラム
理事長 仲村覚



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18

吉田嗣延

(読み) よしだしえん

デジタル版 日本人名大辞典+Plusの解説

吉田嗣延 よしだ-しえん

1910－1989 昭和時代の官僚。

明治43年8月5日生まれ。昭和12年沖縄県社会教育主事となり、方言論争では県側の推進する標準語励行を主張。31年より南方同胞援護会の事務局長、本土復帰後はその後身の沖縄協会専務理事をつとめ、沖縄と本土との橋渡しにつくした。平成元年5月10日死去。78歳。沖縄県出身。東京帝大卒。



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛
2019/3/18

Amazonで“吉田嗣延”著の検索結果





昭和58年頃

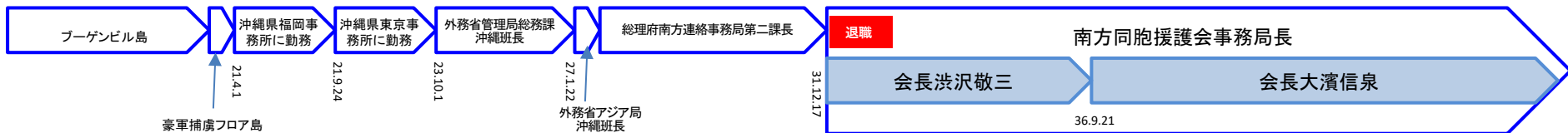
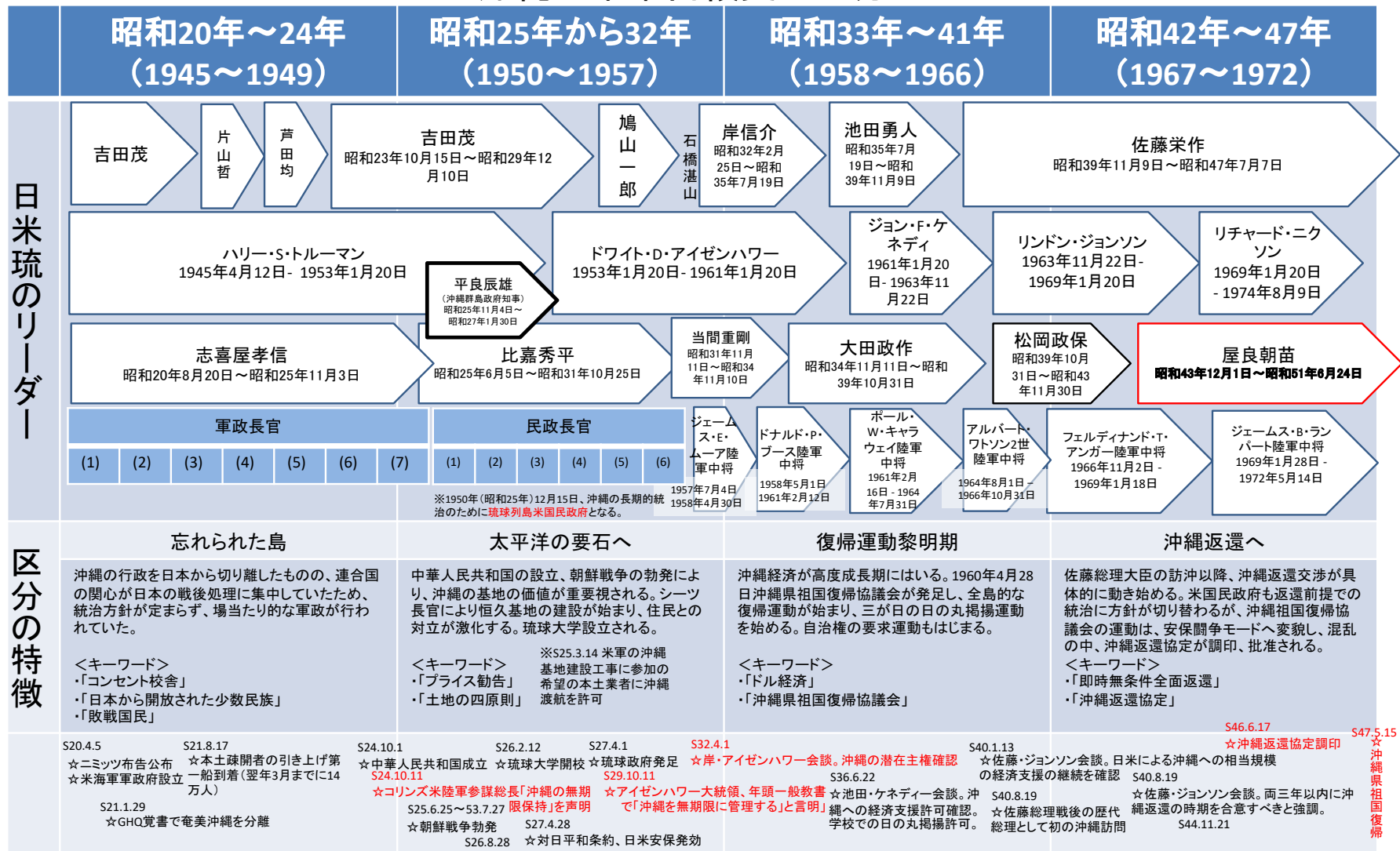


一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18

沖縄の米軍占領史の区分



首里市立第一尋常高等小学校卒業
最前列右から5人目（大正12年3月）



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛
2019/3/18

沖縄県立第一中学校卒業（昭和3年3月。
稲福全志氏提供）



小学校卒業時（大正12年3月）



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 覚
2019/3/18

前列左から2人目、松江高校の時、名護の高尾
野氏邸で帰省学生の雄弁会に参加（昭和4年頃）



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 覚
2019/3/18



明石市社会教育主事時代。明石駅ホーム
(昭和12年10月ごろ)



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村寛
2019/3/18



善子夫人へ「筋骨も神経も顔面筋も中々
逞しい二等兵でせう」と中支から（本人の
署名入り昭和15年11月20日）



吉田一等兵とチビ君。宣撫班として「先生」と現地
民から呼ばれた（昭和16年3月）。このあとブーゲン
ビル島での死闘が待っていた



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18

九死に一生を得たブーゲンビル島での襲撃

吉田嗣延は明治43年沖縄県首里市に生まれ、沖縄県立第一中学、松江高校を経て、昭和10年、東京帝国大学文学部を卒業。昭和11年から兵庫県明石市社会教育主事、その後、故郷の沖縄県庁社会事業主事、地方事務官を歴任しました。当時は沖縄で方言論争が繰り広げられている時で、吉田は沖縄の方言は本土では全く通用しないので、全国に通用する人材を育成するために、共通語の励行推進の先頭に立っていました。そのような中、昭和15年3月、吉田は教育召集を受け、熊本陸軍に召集され、熊本輜重兵第6連隊に入隊。敗戦色が強くなった昭和18年1月20日ブーゲンビル島に到着、19年5月頃には吉田はインドネシアの東のソロモン諸島、その中の最も大きな島、ブーゲンビル島のコロミナ地区に軍曹として警備の任務にあたっていました。日本軍は2ヶ月前のタロキナに上陸する米軍への総攻撃に失敗し、反対側の東海岸沿いに陣地を構え、既に部隊の兵員の半分は消耗していました。餓死者が続出する中、吉田は隊の自活の道を開くため、農園班長と先住民の協力をえるための宣撫班長も命ぜられていました。陸稲、さつまいも、かぼちゃ、茄子、オクラ等植え付け、秋には収穫が始まり、将兵の命を蘇らせ餓死から救ったのです。

現地の酋長はマテイクという40代の人望の厚い人物であり、吉田を信頼し農園開墾にも作業員を差し出し協力を惜しみませんでした。昭和20年4月19日、吉田の属する大隊はマテイクからお祭りへの招待を受けました。阿部大隊長と吉田以下40名ぐらいが参加しました。山の台地の広場には老若男女150名ぐらいの先住民族が集まり、午前10時ごろから踊りが始まり、豚の石焼や果物などのごちそうも出されました。飢えの中で殺戮を繰り返していた将兵にとって心も和み、まさにそこは楽園でした。午後2時、踊りが中断し、大隊長が本日の祭りへの招待と日頃の日本軍への協力に感謝の意を述べ、吉田がビジン英語（現地なまりの英語）で力強く通訳しました。大酋長マテイクは、日本軍に最後まで協力することを誓うと宣誓し、再び踊りが再開されました。

翌日未明、楽園気分がまだ抜けない中、再び殺戮の世界が展開する大事件が起こりました。農園班が、マテイクの部族により襲撃を受けたのです。この襲撃でかろうじて生き残ったのが吉田と部下の赤嶺兵長の二人だけだったのです。先住民十数人は柄の長い斧を持って、仮設兵舎になだれ込み、入口から順次兵隊の頭部を打ち砕いて即死させたのです。一番奥に寝ていた吉田と赤嶺兵長の二人は、隊員の悲鳴により目覚め、急を注げるために走り出し、赤嶺は大男の先住民に追い詰められスコップをとって格闘しましたが、右上腕部を叩き折られ、地面に倒れたところを死んだと間違えられ、九死に一生を得ました。吉田は逆の方向に走りジャングルに入り、敵の目を避けながら大隊本部に辿り着き、大隊長に事件を報告しました。結局マテイクは連合軍の買収により寝返っていたのです。ブーゲンビルでは他の複数の農園班でも襲撃を受け被害がでていました。

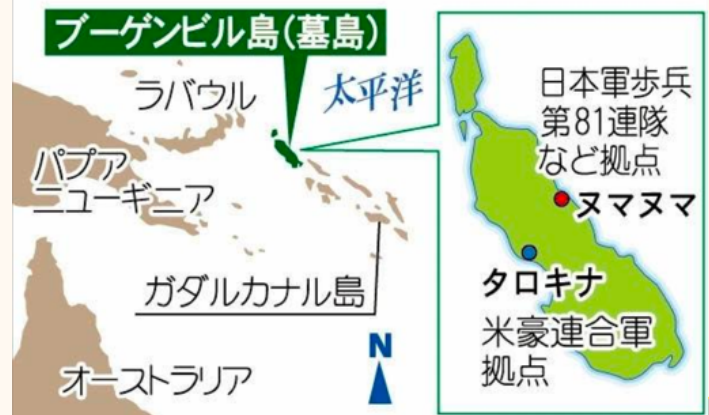
【「新発見！沖縄（ハ重山日報連載）」仲村覚著より】

ブーゲンビル島の戦い

ブーゲンビル島の戦い（ブーゲンビルとうのたたかい）は、太平洋戦争（大東亜戦争）中の戦闘の一つである。日本軍が占領したブーゲンビル島で、アメリカ軍が上陸した昭和18年11月1日から停戦の昭和20年8月21日まで戦われた。

タロキナ総攻撃

昭和18年11月歩兵第23連隊を中心とした第6師団部隊約1200名によりタロキナ奪還作戦が試みられ、困難なジャングル内の移動で消耗しつつも11月7日に戦闘を開始した。湿地帯だったため膠着状態になったが、11月9日の戦闘でアメリカ軍が大きく押し返した。日本軍部隊は補給も続かず、11月11日に作戦中止して後退した（第一次タロキナ作戦）。



帰郷の望みを絶たれた沖縄出身者

昭和21年3月13日の朝、吉田は復員船により広島の大竹に着きました。吉田の中隊は出征の時403人でしたが、この日は30人に減っていました。故国の土を踏んだ瞬間おもわず、歓声があがりましたが、その歓声もやがて消え去っていきました。他府県出身のものが次々と解散、復員する中、沖縄出身の者は帰るべき場所が無いのです。沖縄は米軍の占領により交通が断絶していることが伝わってきて、前途暗澹たる気持ちになってきたのです。同郷の復員兵の一人が「吉田、おまえは応召するまで、沖縄県庁につとめていたというではないか。知人もあろう。これからの身の振り方について、なんとか骨を追ってくれ」と頼み込んできました。沖縄県出身の復員者は皆、吉田を頼ってきたのです。吉田は沖縄からの集団疎開先だった熊本に行くことに決めました。学童疎開のための連絡所があるはずだからです。3日後、沖縄出身者総勢40人、全員の賛同を得て、各自150円の現金と乾麵包の支給を受けて、汽車に乗って熊本に向かったのです。二日後、熊本に到着。現地は雨でした。吉田は一行を駅の待合室に残して単身で熊本城に向かいました。幸い、沖縄の連絡書が見つかりました。「沖縄県熊本事務所」です。所長は、呉我春信氏。そこでは、沖縄に帰ることはまず不可能であることをはっきり知らされたのです。2日間、汽車に揺られながら描き続けた、故郷に帰り家族と再開する夢は、無残にも絶たれてしまったのです。事務所に依頼して、熊本城内にある兵舎を宿舍にし、広島からの一行を迎え入れ、全員で土間に敷いた藁にくるまって寝ました。吉田はみんなの寝姿を見ながら、「ここにいるものは全員がウチナンチュだ。この沖縄の人々のためにこれからの半生をかけてみよう」と心ひそかに誓ったのです。その後、吉田は戦友を熊本近在の農家などに手伝いとして住み込ませるよう働きかけ、数日で全員の就職が決まりました。

吉田はこれまで戦友には口外していませんでしたが、妻子が学童疎開で、阿蘇の奥の小国町にいるはずでした。戦友の就職先が確定し、一段落した吉田は、小国町に向いました。夕方肥後線の内牧という小さな駅で降り、その日の小国町行きのバスが無いと、駅の待合室で一泊しようと仮眠の準備をしていました。そこへ、よれよれの詰襟服を着た中学生が近づいてきて、「あなたは南方からの復員ですか」と聞かれたので、そうだと答えたら、「もしや沖縄出身の人では…吉田といいませんか？」と聞いてきたので、再び「そうだと答えると、「兄さん！私です。弟の嗣雄（しゅう）です。」吉田は反射的に少年の学帽を取り、後頭部を凝視し、そこに見慣れたハゲを確認

しました。「まさしく弟だ！」応召してから6年、弟は中学生になり、吉田は栄養失調で40Kgに痩せ衰え、お互いに見分けがつかなくなっていたのです。弟は、沖縄出身者の復員兵が熊本に集まっていると伝え聞き、もしやと思って、放課後毎日駅に詰めかけていたのです。小国町には、学童だけでなく集団疎開や南方諸島からの引揚者、復員兵など沖縄県人が数多くいました。子どもたちはほとんどが栄養失調になり、また皮膚病にも悩まされていました。食を求めて夜ひそかに逃亡するものさえいましたが、それを大人たちもどうすることも出来ませんでした。みんなが飢え、生きる気力を失っていたのです。「今のうちになんとかしては。このままでは、この人達はついに流亡の民となってしまふ。」

吉田はそう思って、小国町滞在3日で、福岡に向ったのです。それは、福岡にいる沖縄県知事代理官北宮造氏に直談判するためです。「本土にいる沖縄県民を一日でも早く帰郷させるべきである。」と熱心に説きました。それでは、沖縄現地の実情を実際に目で確かめようではないかということになりました。福岡にある軍政官部を通じてGHQに対し、調査のための沖縄渡航を申請しましたが、すぐに拒絶され、また出しても再び拒絶され、結局3回拒絶されてしまいました。

【「新発見！沖縄（八重山日報連載）」仲村覚著より】

福岡沖縄県事務所

福岡沖縄県事務所（ふくおかおきなわけんじむしょ）は1940年代に福岡県福岡市に置かれた沖縄県庁の事務を継承した組織。沖縄県では、九州各地に疎開した沖縄県民の世話のため、福岡に仮事務所を置いていた。1945年6月に島田徹知事らが自決し、アメリカ軍の軍政下におかれたことで、沖縄県庁は事実上活動を停止した。

そのため、**7月に内務省は正式に「福岡沖縄県事務所」を設置した。**県知事代理には、出張で沖縄戦の難を逃れた沖縄県内政部長が任命された。しかし1948年にGHQの命令で廃止された。沖縄県民の戸籍事務は沖縄関係戸籍事務所が担当することになった。このときをもって1972年の沖縄返還まで日本の地方公共団体としての沖縄県は制度上廃止された。



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18

決死の沖縄密航から沖縄県東京事務局所長

■沖縄密航計画の作成

吉田は北氏や沖縄関係の新聞を発行している親泊政博などと具体的な打ち合わせを始めた。自らがすすんでその任にあたることを申し出て、同行者に海軍から復員して沖縄県福岡事務所に努めている瑞慶村智啓氏を選びました。昭和21年7月、吉田と瑞慶村は各課長同席の前で、北栄造沖縄県副知事より沖縄密航の任務が言い渡されました。それから、出発するまで、吉田は瑞慶村と綿密に行動計画を打ち合わせました。

7月20日、ついに、銃殺のリスク覚悟の密航計画が実行に移されました。吉田と瑞慶村は西鉄福岡駅午前9時の汽車で熊本に出発しました。密航計画のため、見送りは極限られた人々だけでした。熊本事務所に一泊。そこで、沖縄現地の新しい情報を得ることができました。翌日、午後5時頃、出港地の日奈久に着き、海岸近くの古びた旅館に宿泊。そこには、国場幸太郎氏と二人の同行者、漁船の乗組員が集合していました。

■銃殺覚悟の出港＝二度目の出征

日奈久で天候待ちのため数日出港を見合わせた後、7月27日吉田らを乗せた14トンの小型漁船は岸壁を離れ、薩摩半島を左に見て一路奄美大島を目指し全速で運航を続けました。午後五時頃には悪天候に襲われ、大波が幾度も襲いかかり、小さな漁船は度々今にも分解しそうなきしみ音を立てています。長い死闘の末、東の空が明るくなり、強風も嘘のように静まりました。翌日には口之島が見えてきました。この島は北緯30度にある島で、ここを超えれば、米軍の占領海域です。吉田は、Uターンをせよとの命令が喉まで突き上げてきましたが、ためらったまま船は既に占領海域に侵入していました。翌日は奄美大島に南端の管屯に寄港し、現地の方に沖縄県福岡事務所の者で沖縄へ航海中であることを告げ、小学校の校長先生から貴重な情報を得ることができました。①米軍偵察機が厳重に警戒にあたっていること。②沖縄船籍の番号と船名を記した大きな標識が絶対に必要であること。③夜間の航行が極めて安全であることの3点です。校長は、自ら納屋の板戸を外し、「沖縄、仲宗根丸、236号」と揮毫され、寄贈してくれました。日暮れを待って伊平屋島に向って出港。翌日から米軍偵察機と数回遭遇しましたが、校長が寄贈された標識のおかげで、怪しまれることなく無く航行を続けることが出来ました。7月31日夕方近く、伊平屋島に上陸。ここでも、沖縄本島の状況について多くの情報を得て午後7時頃に国頭村の鏡地という小さな漁港に向って出発。

■国頭村鏡地から石川の収容所へ

昭和21年8月1日夕方、吉田らを載せた14トンの漁船は、ついに沖縄本島北部の岸に近づきました。暗闇の中、午後9時過ぎ、国頭村北部の小さな漁港、鏡地に投錨しました。熊本県の日奈久を出向以来、6日目をかけて、ついに沖縄潜入に成功したのです。吉田は、瑞慶村智啓に、石川の収容所にいる牧志孝信氏宛の密書を託しました。密書は、吉田の友人でもあり、瑞慶村の恩師でもある安里延学務長に渡す予定です。瑞慶村は、民間の軽自動車で鏡地を出発、琉球列島米国民政府のある石川を目指しました。幸いにも羽地からは文教部のジープに乗り換え、検閲無しで石川に到着しました。町はバリケードで囲まれ、多くの住民がその中に収容され生活をしていました。夜道歩いてを安里先生宅に到着すると「吉田課長が密命を帯びて来島していること」「吉田課長の密書を知事に手渡ししてもらいたいこと」を説明すると、安里先生は快く承諾しました。

しかし、翌日の知事の回答は、「合うことはできない」というものでした。吉田は、安里課長からの返書を持って、民間のトラックを3度も乗り継ぎ、夜遅く鏡地に到着しました。翌日、吉田は直接牧志知事と面談する決意のもと、瑞慶村とともに、藁を積んだトラックに身を隠し石川に向かいました。幾度かの検閲も無事通過して石川に到着。直ちに、知事室に飛び込みました。知事はじめ幹部らは驚きを隠すことのできない様子でした。又吉康和副知事をはじめ、部長以上と協議を開始したところ、本土から密使が来たことが一般職員にも知れ渡り、食堂で職員全員が吉田の報告会を聞くことになりました。そこで、吉田が演壇に立った時、たまたま訪ねてきた米軍の教育部長が、暴動が起こったと早合点し、吉田は演題から引きずり下ろされ、「この男は誰だ!」と追求されたところ、知事以下誰も返事をする事ができなかったのです。

■銃殺を中止し島内視察を黙認したレイトン中佐の武士道

激怒した教育部長は本部に報告。政治部長のレイトン中佐が武装した米兵十数人を連れて駆けつけ、有無を言わず、吉田を監禁してしまいました。吉田は、兼ねて覚悟していたとはいえ、絶体絶命の窮地の中、必死に対策を練り続けていたところ、2時間後ぐらいに、レイトン中佐が入ってきて、次のように言いました。「報告会は開いても良い。島内の状況視察も黙認しよう。ただし、MPにだけは捉えられないように注意せよ。」。吉田はとっさに日奈久からの漁船での苦しみを思い出し、図に乗って「帰路は飛行機で東京に送ってくれ」と要望しました。レイトン中佐の表情が厳しくなり、しかし静かな口調で「許可なくして来たものは許可なしに帰れ。これが最大の好意というものだ」と言い、大きな手で吉田の手を握り、低い声で「自分は日本の武士道精神をわきまえているつもりだ。」と付け加えました。その時吉田は、監禁されている2時間の間、何が起きているか全く知らされていませんでしたが、後年、当時の警察局長の仲村兼信から、米軍は知事以下幹部を緊急招集して、吉田という男は沖縄のためになるのか否かを訪ね、イエスカノーで返答を求めたところ、全員がイエスと答えたので、一旦決定していた銃殺を変更したとの裏話を聞かされ、自分の悪運の強さに驚いたのです。

■銃殺を中止し島内視察を黙認したレイトン中佐の武士道

吉田は自ら運転して同行すると名乗り出てくれた与那原出身の上原繁義氏が運転するジープでなお残る戦車の残骸を超え、壕に埋もれた屍に手を合わせながら、北は国頭村の奥から南は摩文仁まで島内の実情をくまなく見て回りました。後に知事や行政主席となる平辰雄、当間重剛、松岡政保等とも会い、沖縄の進むべき道について意見も聞きました。

福岡に帰着した吉田は、直ちに内務大臣と沖縄県知事代理官に復命書を書きました。復命書では、米軍の統治機構の状況や民心の動向などを詳細に分析記述し、沖縄の政治経済の実情、そして最後に、本土にある沖縄の行政事務機構だけでは、複雑困難な問題の解決は到底不可能である。これは中央の日本政府自体が直接取り組むべき重要な課題である。このため、内務省内に臨時沖縄県行政事務局を設置するべきだと提言したのです。臨時沖縄県行政事務局に賛同した北栄造沖縄県知事代理官は、その実現を図るべく吉田を沖縄県東京事務局所長に任命しました。

【「新発見! 沖縄 (八重山日報連載)」 仲村覚著より】



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18



沖縄密航後、沖縄県東京事務所長時代
(昭和22年ごろ。瑞慶村智啓氏提供)



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18

■ニミツ布告(昭和20年沖縄上陸時)

米國海軍政府 布告第一號

米國軍占領下ノ南西諸島及其近海居住民ニ告グ
日本帝國ノ侵略主義並ビニ米國ニ對スル攻撃ノ爲、米國ハ日本ニ對シ戰爭ヲ遂行スル必要ヲ生セリ
且ツ是等諸島ノ軍事的占領及軍政ノ施行ハ我ガ軍略ノ遂行上並ニ日本ノ侵略力破壊及日本帝國ヲ統括スル軍閥ノ破滅上必要ナル事實ナリ
治安維持及米國軍並ニ居住民ノ安寧福祉確保上占領下ノ南西諸島中本島及他島並ニ其近海ニ米國政府ノ設立ヲ必要トス
故ニ本官米國太平洋艦隊及太平洋區域司令官兼米國軍占領下ノ南西諸島及其近海ノ軍政府總長米國海軍元帥シー ダブリュー ニミツ ハ茲ニ左ノ如ク布告ス
一南西諸島及其近海並ニ其居住民ニ關スル總テノ政治及管轄權並ニ最高行政責任ハ占領軍司令官兼軍政府總長 米國海軍元帥タル本官ノ權能ニ歸屬シ本官ノ監督下ニ部下指揮官ニ依リ行使サル
二日本帝國政府ノ總テノ行使權ノ行使ヲ停止ス
(中略)

一九四五年 月 日

米國太平洋艦隊及太平洋區域司令長官兼南西諸島及其近海軍政府總長

■行政分離(昭和21年1月19日)

連合国軍最高司令官總司令部
連合国軍最高司令官

APC 500 1946年1月29日

AG 091 (29 Jan 46)GS(SCAPIN-677)覚書：日本帝國政府經由：終戦連絡中央事務局終戦連絡中央事務局件名：若干の外かく地域を政治上行政上及び行政上日本から分離することに関する覚書1 日本国外の総ての地域に対し、又その地域にある政府役人、雇傭員その他総ての者に対して、政治上又は行政上の権力を行使すること、及、行使しようと企てることは総て停止するよう日本帝國政府に指令する。

2 日本帝國政府は、已に認可されている船舶の運航、通信、気象関係の常軌の作業を除き、当司令官から認可のない限り、日本帝國政府の役人、雇傭員その他総ての者との間に目的の如何を問わず、通信を行うことは出来ない。

3 この指令の目的から日本と言ふ場合は次の定義による。

日本の範囲に含まれる地域として

日本の四主要島嶼(北海道北緯30度以北の琉球(南西)諸島(口之島を除く)、本州、四国、九州)と、対馬諸島、を含む約1千の隣接小島嶼

日本の範囲から除かれる地域として

① 鬱陵島、竹島、済州島。

② 北緯30度以南の琉球(南西)列島(口之島を含む)、伊豆、南方、小笠原、硫黄群島、及び大東群島、沖ノ鳥島、南鳥島、中ノ鳥島を含むその他の外廓太平洋全諸島。

③ 千島列島、齒舞群島(水晶、勇留、秋勇留、志発、多楽島を含む)、色丹島。

(以下省略)

■沖縄県事務の所閉鎖

二十二年の秋だった。GHQのエレベーターの中で、内務省の地方局総務課長鈴木俊一氏と乗り合わせた。私はかねて私が提案していた臨時沖縄県行政事務局案 どうなっているかと問うた。鈴木氏は低い声でこう言った。

「それどころではありませんよ。内務省そのものがなくなろうとしているんですよ」私は愕然として鈴木氏をみつめた。その顔は蒼白であった。こうして、その年の終わりとともに、内務省は解体された。GHQの、日本の官僚組織の弱体化と地方行政の分断をねらう意図から出たものであることはもちろんである。同時に、私の臨時沖縄県行政事務局案も日の目をみるとなく雲散霧消してしまった。

23年の夏のある日、GHQのケーディス政治部長が私を電話で呼んだ。かけつけると、やぶからぼうに「即刻本土にある沖縄県の事務所を閉鎖せよ」という。ただそれだけである。何のこともわからない。理由をたずねても説明はない。

私は「口頭ではなく、はっきりした行政命令がなければ、きくわけにはいかない」とあらがった。彼は「そんなものは出せん」と言う。私は「それではエイドメモ(控書)でもよい」と折れたが、彼はなおも突っぱねて、こう言った。

「俺が命令すればそれでいいんだ。俺の言動は、すべてオールマイティである」

如何に抗弁しても、しよせん、螻蛄の斧である。結局、本土にある沖縄県の行政機構は一切消滅させられるときがきた。その年の9月7日の閣議で、日本政府は沖縄関係係務処理要綱なるものを決定したのである。(吉田嗣延著「小さな闘いの日々」P27~P28)

■内務省解体

維新三傑の一人である大久保利通が主導して設立した中央官庁の一つ。主に地方行財政と警察を所管し、明治～戦前の日本では、「官庁の中の官庁」として中央官庁の中心的存在であった。近代の日本の中央官庁の中核的行政機関。地方行財政、警察、土木、衛生、国家神道などを担った。昭和22年にGHQの命令で解体・廃止。

明治6年、大久保利通により設置。

明治18年、内閣の一省となり警察・地方行財政など、内政一般を掌る。官選知事を通じて内政全般に関与した。

明治20年、造神官使庁をおき宗教政策を強化。

昭和3年、大逆事件を機に、特別高等警察(特高)を全国設置し、共産主義・社会主義の取締まりを強化。昭和22年、日本敗戦後、連合国軍最高司令官最高司令部(GHQ)の指令により、日本の中央集権的官僚行政の中核であったこと、軍部と組んで日本を軍国主義国家にしたとの理由で解体された(実際は、軍部とはゴースト事件などで何度もトラブルになっており、友好関係にはなかった)。

現在の総務省、警察庁、国土交通省、厚生労働省は、内務省の後継官庁に当たる(旧内務省系官庁)。法務省の外局である公安調査庁や、文部科学省の外局である文化庁も、旧内務省の後継官庁の一つである。また、神社行政を統括していた神社局は戦後の政教分離の原則で廃止。その後の神社の統括は宗教法人神社本庁へ移された。

■加速する沖縄の恒久軍事拠点化

昭和24年

10月1日 中華人民共和国成立

10月11日 コリンズ米陸軍参謀総長来日 「沖縄無条件保持、在日米軍の長期滞在を言明

昭和25年

1月12日 アチソン米國務長官「米の安全保障の線はアリュシャン列島・日本・沖縄・比島」と演説

1月31日 ブラッドレー米統合参謀本部議長来日。「沖縄・日本の軍地磁気強化」を声明。その後沖縄訪問。

2月10日 GHQ「沖縄に恒久的基地建設を始める」と発表。3月17日工事開始。2カ年計画。

3月14日 米軍の沖縄基地建設王子に参加希望の本土業者に沖縄渡航を許可。

6月25日 朝鮮戦争勃発。

11月14日 米國務省、対日講話七原則を発表



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18

沖縄関係残務処理要綱
昭和23年9月7日 閣議決定

- 一 **沖縄県事務所はこれを廃止**し、残務事務は左の如く関係各省において処理する。
- (1) 戸籍事務は戸籍法の特例を設け、法務庁管下の官署において取扱うこととする。
 - (2) 恩給事務は恩給法を改正し、恩給局においてこれを処理する。
 - (3) 従来の公有財産は、その処理の終局的決定に至るまでこれを政府の管理に移し、外務省がその任にあたる。
 - (4) 給与諸証明その他の事務は、外務省において一括処理する。

二 右処理に伴って次のような法令上及び予算上の措置を講ずる。

- (1) 地方自治法施行規則を改正し、第七十六条を削る。
- (2) 戸籍法の特例を設ける法規及び恩給法の改正法規の制定は、本件処理の特殊性に鑑み、連合国最高司令部の指示に基き、**ポツダム政令をもってこれを規定する**。
- (3) 法務庁及び外務省の官制を改正し、定員を増加する。
- (4) 所要経費は、関係各庁において夫々予備費をもって支弁する。

なお、六月以降の沖縄県事務所の経費及び廃止に伴う整理費は、総理府官房自治課において従前の例により措置する、

備考

- (1) 本件は十月一日より実施する。
- (2) 本件決定に伴い、昭和二十三年七月九日の閣議決定は廃止せられたものとする。

理由

沖縄県事務所を廃止するとともに、沖縄県事務を関係各省に移管する必要があるからである。



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18

南方連絡事務所の開設

secretary of State Dean G. Acheson's speech, Crisis in Asia - An Examination of U.S. Policy (January 12, 1950)

This defensive perimeter runs along the Aleutians to Japan and then goes to the Ryukyus. We hold important defense positions in the Ryukyu Islands, and those we will continue to hold. In the interest of the population of the Ryukyu Islands, we will at an appropriate time offer to hold these islands **under trusteeship of the United Nations**. But they are essential parts of the defensive perimeter of the Pacific, and they must and will be held.

この防御的な境界線はアリューシャンに沿って日本に行き、そして次に琉球に行きます。私たちは琉球諸島には重要な防衛職を持っており、それは今後も変わりません。琉球諸島の人々の利益のために、私たちは適切な時期にこれらの島を国連の管理下に置くことを申し出ます。しかし、それらは太平洋の防衛的境界線の本質的な部分であり、それらは保持されなければならないとして保持されるであろう。

署名簿は「8月28日に航空便で東京に送った」との連絡が平良辰雄氏から届いた。われわれの運動がいよいよ結実する日も間近い。私は胸をときめかせて、その到着を待った。しかし、3日たっても梱包は私のところに着かない。首相の出発の日は迫っている。気が気でない。私は外務省内のしかるべきところを、くまなく調べてまわった。やはりない。もしかしたら米側の謀略にかかってヤミからヤミに葬りさられたのでは……とも思った。数回沖縄と連絡のすえ、宛名が内閣総理大臣兼外務大臣吉田茂殿となっていることがわかった。早速、首相官邸に電話で問い合わせたが見当たらないとの返事。私は首相官邸に乗りこんで自ら調べてみる決心をして、倭島アジア局長にその斡旋をたのんだ。彼は快く私の願いを聞いてくれて、首相主席秘書官の松井明氏(のちの国連大使)に連絡をとってくれた。私は、早速、首相官邸に赴いた。

「あった！」署名簿の包みを私は発見した。首相官邸のうすぐらい物置の隅に、無造作に四個の包みが積み上げられていた。それは一列につなげば、約3メートルにもなるうかと思われるほどの大部のものであった。これが血の叫びともいべき沖縄の意思の表明であるのか、私は、いたわるように、積み上げられた包みに、そっと手かけた涙が流れた。私は、松井秘書官に、包みの中の署名簿の何たるかを説明して、吉田首相に是非とも直接披見してもらうよう、口添えをたのんだ。松井氏も強く感動して承した。

吉田首相が対日平和条約に向けて出発する2日前、松井秘書官から私に連絡があった。感無量の体で署名簿の束をみつめていた種々おは、ただひとこと

「わかった」と強くうなづいたというのである。

私は、首相のこの一諾に、千万言にも勝る信頼感をおぼえた。

(吉田嗣延著「小さな闘いの日々」P51～P52)

外務省の私達は、倭島アジア局長を中心に集まって演説の内容が電報されてくるのを今や遅しと待っていた。「総理は沖縄、奄美などの領土問題にふれてくれるだろうか」だれかがいった。10名ちかくいたもののうち、私を除いて他は「ふれないだろう」と結論した。

(中略)

時計はすでに11時に近かった。突然、倭島局長が私のところに駆け込んできて叫んだ。

「ワンマンは領土問題にふれたぞ。沖縄に言及したぞ」

長い間闘ってきた、われわれの願望は、これで最後の一線を確認することができたのだ。最悪の事態はさけられた!私は瞬間すーっと力が抜けて、くずれるようにイスに座った。吉田首相は演説の中で、とくに領土問題をとりあげ、次のように力説した。

「平和条約第三条によって国際連合の信託統治制度下におかれることがあるべき琉球列島などの諸島の主権が日本に残されるという米、英両国全権の発言を、私は国民の名において多大の喜びをもって了承するものであります。私は世界とくにアジアの平和と安定が速やかに確立され、これらの諸島が一日も早く日本国の行政の下に戻ることを期待するものであります」

(中略)

平和会議は終わった。「勝つことができなかったが、決して負けてはいない。」というのが、そのときの私の、率直な感慨だった。

(吉田嗣延著「小さな闘いの日々」P51～P57)



日本復帰期成会はサンフランシスコ講和条約に反対し、沖縄の即時復帰の嘆願書と署名簿を講和会議参加国全権に送付しました。1951年8月28日(写真:『沖縄県祖国復帰闘争史』沖縄時事出版より)



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18

(昭和28年4月 舞鶴港。後列右から5人目。上江洲久氏提供)



南方連絡事務局時代、沖縄出身のシベリア引揚者出迎え



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛
2019/3/18

南連事務局第二課長時代、官邸で（昭和28年ごろ。
前列左端。その右へ石井通則局長、山城篤男沖縄遺族連合
会会長。鳴海忠一氏提供）



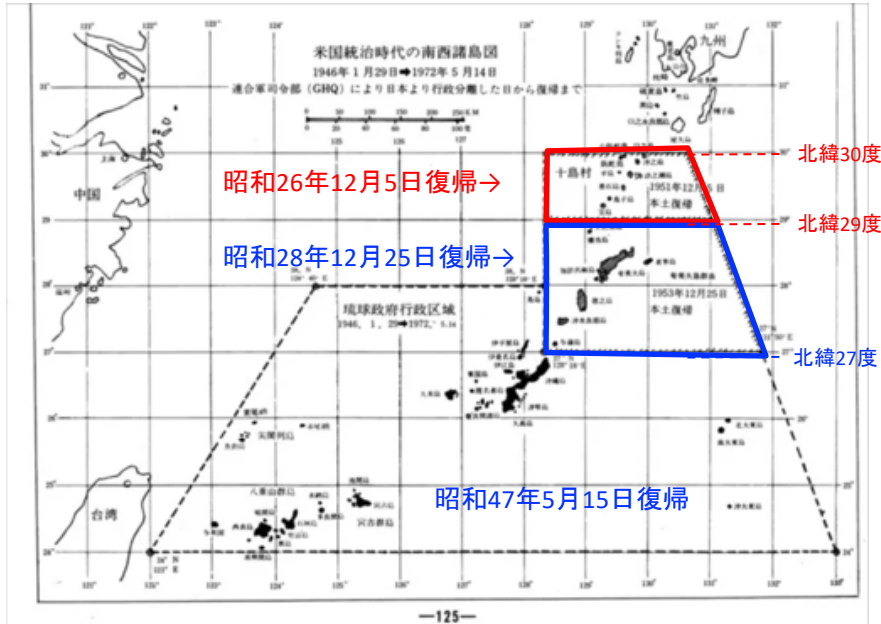
一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18

十島村返還と金十丸事件

十島村祖国復帰（昭和26年12月5日）



金十丸事件

戦前に、鹿児島県大島郡出身の金井正夫代議士が、交通不便に悩む十島村の島民のために、鹿児島と十島村の島々を往来できる風浪に強い六百トンの汽船を造って就航させた。金井と十島とをとり金十丸と命名されたのが、これである。それが、占領後、米軍の斡旋で、奄美群島間の交通のため新たに海運会社を設立することになり、十島村も金十丸を現物出資して、これに加入した！ここまでは順調にいった。ところが、実際に運航するときになってみると、船堀の足りないこともあって、金十丸は、ほとんど奄美海域にのみ使われて、十島村の島民はなんの便益も受けられない始末。怒った十島村の村民は金十丸を返せと迫る。返すと奄美の島嶼間の交通に破綻をきたすので、大島の軍政府や地元関係者は、容易にこれに応じない。そこで十島側は、那覇にある沖縄民政府に直訴におよんだ。それでゴタゴタしているところに十島村の返還問題が起こり、船の帰属をめぐって事はいよいよ紛糾した。紛争が続いているあいだ、金十丸は奄美の名瀬港に繋留されたままとなっていたが、1月下旬のある夜、十島村の青年たちは、折からの嵐を利用して、これに乗取り、鎖網を断ち切って、漆黒の海上を鹿児島港に逃げ込んだ。

（吉田嗣延著「小さな闘いの日々」P69～P70）

三島村

1908年（明治41年）の島嶼町村制施行に伴い、トカラ列島及び現在の三島村の区域に十島村（じつとうそん）として設置され、1952年（昭和27年）2月10日に村の区域を北緯30度以北（口之島を除く）に変更し、同時に村名を三島村に変更した。現在の十島村の区域は、同日に列の自治体として設置されたものである。



西暦	元号	米国の沖縄統治機関	中央行政機関	沖縄本島	宮古	八重山	奄美
1945	昭和20年	琉球列島米国民政府	無し	沖縄諮詢会	宮古支庁	八重山支庁	大島支庁
1946	昭和21年						
1947	昭和22年						
1948	昭和23年			沖縄民政府	宮古民政府	八重山民政府	臨時島北部支庁
1949	昭和24年						臨時島南部支庁
1950	昭和25年	琉球列島米国民政府	臨時琉球諮詢委員会	沖縄群島政府	宮古群島政府	八重山群島政府	奄美群島政府
1951	昭和26年		琉球臨時中央政府				
1952	昭和27年						
～	～			琉球政府			
1972	昭和47年						

(1) 琉球臨時中央政府（1951.4.1～1952.3.31）

(1) 沖縄諮詢会（1945.8.15～1946.4.26）

(2) 沖縄民政府（1946.4.24～1950.11.3）

(3) 沖縄群島政府（1950.11.4～1952.3.31）

(1) 宮古支庁（1945.12.8～1947.3.21）、

(2) 宮古民政府（1947.3.21～1950.11.17）

(3) 宮古群島政府（1950.11.18～1952.3.31）

(1) 八重山支庁（1945.12.28～1947.3.21）

(2) 八重山民政府（1947.3.21～1950.11.6）

(3) 八重山群島政府（1950.11.7～1952.3.31）

(1) 大島支庁（1946.2.2～1946.10.3）

(2) 臨時北部南西諸島支庁（1946.10.3～1950.11.24）

(3) 奄美群島政府（1950.11.25～1952.3.31）



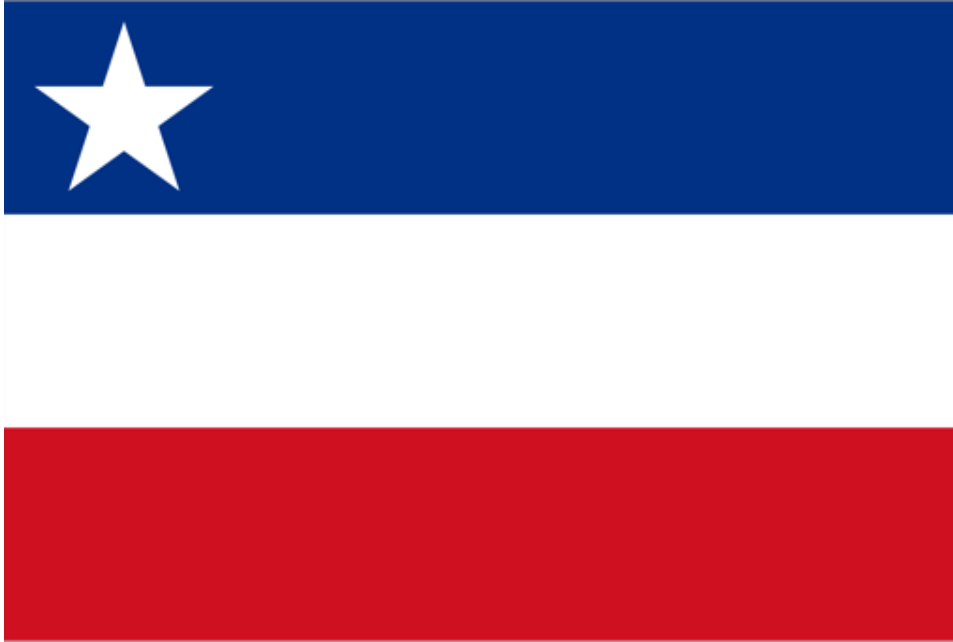
一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18

20

幻の琉球旗



沖縄旗（おきなわき）は、沖縄民政府が「沖縄を象徴する旗」を定めようということで、企画・制定しようとした旗。「琉球旗（りゅうきゅうき）」とも言うが、ここで言う沖縄とは沖縄民政府の行政範囲（沖縄諸島）である。

青は平和を、白は自由を、赤は熱誠を、星は希望を表している。青地に白星、紅白の帯は星条旗と類似の意匠であるが、奇しくもスラヴ系国家の国旗の配色（汎スラヴ色）とも似ており、また東南アジアに居住するカレン族の民族旗と配色・デザインが全く同じだが、無関係である。

1950年（昭和25年）に発表されたが、住民の関心が得られなかったため、琉球列島米軍政府は「琉球の統合政府ができてから決める」と声明を出した。そして後継の琉球政府に引き継がれることもなく、そのまま幻の旗になってしまった。このため、「琉球政府旗」ではない。

玉城デニーホームページ Denny dot com

D21.com : Denny Tameki Official Web Site

← 前へ 次へ →



1972年に本土復帰することが決まる前、沖縄では《琉球独立運動》が盛んに行われていたそうだ。

写真はその名残り。
玉城が生まれる9年前のこと。

その頃、疲弊していた戦後の日本経済は50年6月に勃発した朝鮮戦争の特需によって多大な利益をあげていくことに。

そして日米同盟への発足につながって連合国軍は駐留米軍として日本に居座り続けることになり、現在の安保体制が構築されこととなる。

さすがに、もう、この関係は古臭いと、県民は分かっている。

別れられない、なら《手直し》が必要だ、と。

死亡者も出した琉球船舶旗

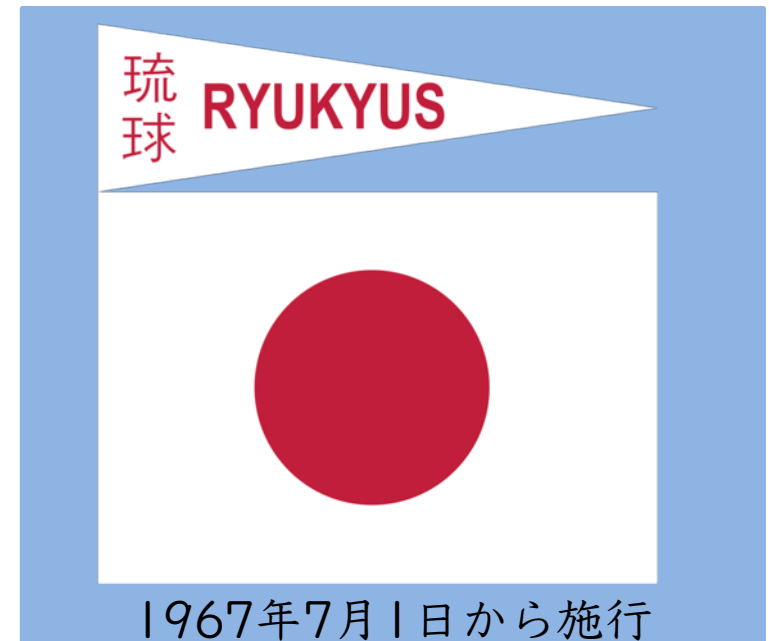
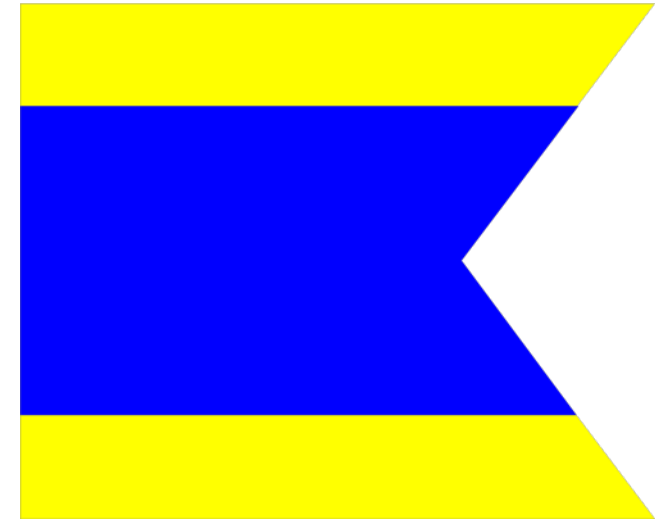
琉球船舶旗（りゅうきゅうせんぱくき）は、「琉球船籍」の船舶が掲げた旗のこと。

国際法では通常、公海を航行する船舶は常時国旗を掲げることになっている。しかし、アメリカ統治下の沖縄の国際法上の地位は不安定で、星条旗（アメリカ合衆国の国旗）も日章旗（日本の国旗）も掲げることができなかった。

琉球列島米国民政府では、国際信号旗のD旗の端を三角に切り落としたものを「琉球船舶旗」に決定し、船舶の掲揚を義務付けた[1]。占領期のドイツの船が「C」旗を、占領期の日本の船が「E」旗を掲揚していたことと同様の処置であった。「D」（NATOフォネティックコードでは「デルタ」）の旗であることから、琉球船舶旗は「デルタ旗」とも呼ばれた。

アメリカ政府は周知を図っていたが、デルタ旗を掲げた沖縄の船が、各国の沿岸警備隊や海軍からたびたび国籍不明の不審船とみなされ、拿捕や銃撃を受けることなどが大きな問題となっていた。1962年には、インドネシア近海で操業中のマグロ漁船が、不審船の疑いでインドネシア軍による銃撃を受け、乗員23人中1人死亡、3人が重軽傷を負った「第一球陽丸事件」が起きている。

1967年に日米両政府の協議で、「琉球表示の三角旗付の日章旗」を掲げることで合意に達し、7月1日から施行された。



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 覚
2019/3/18

南方連絡事務所の開設

そんなある日、アメリカ大使館のコンロイ参事官が私を昼食に呼んだ。
「沖縄への本土からの渡航が急激に増えて、その事務処理に忙殺され困惑している。日本側でも事務機構を新設して協力してくれぬか」
アメリカが、沖縄に本格的な軍事基地の建設を企して、昭和25年はじめ建設土木業者などの沖縄渡航を積極的にみとめて以来、本土からの流入人口は急激に増えてつづけていた。そして、アメリカは、これらの者の渡航関係事務や、して送金、結婚、死亡、災害補償などもろもろの事務処理に手をやいていた。そこで日本政府の在外事務所を那覇に設けて、事務の代行をやってもらいたいというのである。事務機関の設置という和wたし立ちが望み願っていたことを、アメリカ側から言い出してきたのである。これはまさしく絶好のチャンスである。だが、待てよ。私は考えた。在外事務所という瞑想が、ちょっと、ひっかかる。

(中略)

外務省幹部会 も、もちろん異論はなく、この提案にとびついた。名称については結局ジャパニズ・ガバメント・リエイゾン・オフィス・アット・ナハ してはどうかということに決まった。つまり、那覇も大阪も日本であるという点においては同じだということを実質的に示そうというのである。

私は、コンロイ参事官を訪ねて、この名称で事務所を設置したいと申し出た。内心拒否されるかもしれないという懸念があったが、彼の返事は、おどろくほど簡単だった。
「OK」

これに力を得たわれわれは、南方諸地域に設けられる複数の事務所を統括するものとして、外務省内に局 新設することになった。南方連絡事務局がそれである。

(中略)

南方連絡事務局の設置は次官会議でも承認されて、閣議に提出された。ここでも異議なく決定されるものと私たちは思っていた。ところが吉田首相は、断固として、これを認めなかった。
「外務省におくことは不適当である。綴理府にこそ置くべきである」
鶴の一声である。即刻、総理府所管に移された。

(中略)

こうして、昭和27年7月1日、総理府に正式に南方連絡事務局が設けられ、那覇でも8月13日に、日本政府南方連絡事務局が実際の事務を開始した。本土から分断された沖縄などの南方諸地域に、日本がはじめ政治的・行政的な楔を打ち込んだということで、この事務所の開設は歴史的な意義をもっている、と私は心の中で思い喜んだ。

(吉田嗣延著「小さな闘いの日々」P73～P76)

◎南方連絡事務局設置法法律第二百十八号（昭二七・六・三〇）

(設置)

第一条 左に掲げる地域（以下「南方地域」という。）に関する事務（外務省の所掌に属する事務を除く。）を行うため、総理府の附属機関として、南方連絡事務局を置く。

- 一 北緯二十九度以南の南西諸島（琉球諸島及び大東諸島を含む。）
- 二 端島等の南の南方諸島（小笠原群島、西之島及び火山列島をいう。）
- 三 沖の島及び南鳥島

(所掌事務)

第二条 南方連絡事務局は、左の各号に掲げる事務をつかさどる。

- 一 本邦（出入国管理令（昭和二十六年政令第三百十九号）第二条に規定する本邦をいう。以下同じ。）と南方地域との間の渡航に関する事務を行うこと。
- 二 南方地域に滞在する日本国民の保護に関する事務を行うこと。
- 三 本邦と南方地域にわたる身分関係事項その他の事実について公の証明に関する文書を作成すること。
- 四 本邦と南方地域との間において解決を要する事項を調査し、連絡し、あつ旋し、及び処理すること。
- 五 本邦と南方地域との間の貿易、文化の交流その他南方地域に関する事務に関し、関係行政機関の事務の総合調整及び推進を図ること。

■昭和27年7月1日 南方連絡事務局 那覇日本政府南方連絡事務所 設置

連合国軍総司令部の要請により、日本政府は、総理府の附属機関として南方連絡事務局を設置するとともに、那覇に「那覇日本政府南方連絡事務所」を置き、琉球諸島における米側機関との連絡を図るための機関を発足させた。

■昭和33年5月15日 特別地域連絡局 那覇日本政府南方連絡事務所 設置

その後、南方連絡事務局は、奄美大島の復帰に伴い、名瀬市に置かれた連絡事務所が廃止される一方、新たに北方地域に関する事務も所管するとともに、名称も特別地域連絡局と改められて総理府の内部部局となり、那覇日本政府南方連絡事務所は総理府の附属機関となった。

■昭和43年5月1日 特別地域連絡局 日本政府沖縄事務所 設置

さらに、昭和43年5月1日那覇日本政府南方連絡事務所は「日本政府沖縄事務所」と名称変更し、米民政府との協議機能を持った機関となった。

■昭和45年5月1日 沖縄・北方対策庁 沖縄事務局 設置

昭和44年11月佐藤・ニクソン会談で、沖縄の祖国復帰が昭和47年（1972年）中に実現することになったことに伴い、復帰準備に万全を期するとともに、北方領土問題等に関する諸問題を解決するため、特別地域連絡局が拡充され、総理府の外局である沖縄・北方対策庁となった。そして、日本政府沖縄事務所は「沖縄・北方対策庁沖縄事務局」となった。

■昭和47年5月15日 沖縄開発庁 沖縄総合事務局 設置

沖縄の祖国復帰により、沖縄・北方対策庁は廃止され、復帰後の沖縄の経済・社会の各分野にわたる計画的でも実情に即した振興開発のための施策を策定し、これを総合的、一体的に推進する必要があるとの観点から、沖縄の振興開発のための総合的な計画を作成し、その実施に関する事務の総合調整と推進に当たることを主たる任務とし、国務大臣を長とする沖縄開発庁が総理府の外局として設置された。
また、沖縄の振興開発を能率的に進めるとともに、県民の便益に資するため、県民生活に密接な関係のある許認可事務や指導助言等の行政事務、振興開発関連の建設工事等について、一元的、かつ、総合的な事務処理を行うため、沖縄に沖縄開発庁の地方支分部局として「沖縄総合事務局」が設置された。

■平成13年1月6日 内閣府 沖縄総合事務局 設置

新しい時代に見合った簡素・効率的・透明な政府を実現するとともに、内外の変化に機動的に対応できる行政システムへの転換を目指す中央省庁等改革において、沖縄開発庁は、平成13年1月6日に内閣府に統合された。沖縄対策については、沖縄の歴史的、地理的な条件や米軍基地の存在などの諸事情を踏まえ、地域の発展のためのきめ細かな施策を統合的、一体的に推進することが国政上の重要課題であることに鑑み、内閣府に沖縄対策の担当大臣を置き、沖縄担当部局を設置し、沖縄対策に係る総合調整と実施を一体とするほか、沖縄に内閣府の地方支分部局として「沖縄総合事務局」を設置し、従前の機能を継承することとなった。
(内閣府沖縄総合事務局HPより)



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛
2019/3/18

南方同胞援護会の誕生

昭和31年の参議院がすんで間もないころ、自民党 政調会の調査役・石井貫一氏から私に電話がかかってきた。

「衆議院議長室で自民党幹部会を開いているが、沖縄問題について相談したいことがあるので、すぐ来てくれ」

「それならば、局長と共に同道しようか」

「君個人を呼んでいるのだ。とにかく来い」

議長室には自民党の政調会、総務会の幹部十五、六名が集まっていた。その中の橋本竜伍氏が言った。

「いままで自民党の沖縄問題に対する取組み方は、不十分であったことを反省している。今後は、党をあげて、この問題に対処することになったが、ついては当面第一の課題はなにか、君の率直な意見を訊きたい」

私は、かねて私の胸の中につかえていた、もどかしい感慨を吐露するのはこのときとばかり、まくしたてた。

「それには三点がある。」

第一は、政府の沖縄問題に対する取組み方に熱意が足りない。沖縄担当の専任大臣がないため、閣議での発言も軽く見られがちである。総理府にある南方連絡事務局を外局として昇格させ、責任の担当大臣をおくべきである。

次に、国会の論議も不徹底で、野党との論議も十分かみあっていない。衆参両院にそれぞれ常設の沖縄問題特別委員会を設けて具体的に対策を検討すること。

第三は、沖縄問題などの処理は外交的、国際的に微妙な関係も多く、政府が直接取扱うことが困難な場合があり、とくに沖縄の現地に対する援護事業や対外的宣伝などはほとんど不可能な状態にあるので、政府の協力機関として別個に民間団体をつくる必要がある。しかも、それは実効を十分にあげるため超党派の国民的組織であることが望ましい」

高岡大輔氏が口をはさんだ。

「新しく団体をつくる場合、君は行政をとるか、団体を選ぶか」

唐突な質問に、一瞬返答に迷ったが一呼吸して肝に力をこめて私は答えた。

「団体をやりたい」

「君が、その中心となることを前提として新しく沖縄問題などの対策のための団体をつくることを了承する」

橋本竜伍氏が結論した。

ここで、それからの私の半世は決定づけられてしまった

このとき、二十年になんなんとする役人生活とも、これでお別れかという感慨が私の頭をよぎり、また同時に、未知の世界への不安と勇気が一瞬去来した。

(吉田嗣延著「小さな闘いの日々」P129～P131)

南方同胞援護会

南方同胞援護会（なんぼうどうほうえんごかい）は、南方同胞援護会法（昭和32年法律第160号）に基づいて、かつて存在した日本国の特殊法人である。略称は「南援」である。日本政府に代わって、沖縄・小笠原問題の解決を図るために1956年（昭和31年）に設立された。当初は財団法人で、特殊法人に改組されたのは翌年の1957年（昭和32年）である。「南方」という名称であるが、1959年（昭和34年）からは北方領土問題も手がけるようになった（1970年に、北方領土問題は北方領土問題対策協会が継承する）。日米交渉の根回しや日本政府への提言などの他に、沖縄住民に対する各種援護事業を行うなど復帰運動に大きな役割を果たした。1972年の復帰に伴い同会は廃止され、沖縄協会に事業は引き継がれた。（wikipediaより）

南方同胞援護会法

法律第百六十号（昭三二・六・一）

第一章 総則

（目的）

第一条 南方同胞援護会は、次に掲げる地域（以下「南方地域」という。）に関する諸問題の解決の促進を図るため必要な調査研究及び啓蒙宣伝を行うとともに、同地域に居住する日本国民に対し援護を行い、もつてその福祉の増進を図ることを目的とする。

一 硫黄島及び伊平屋島並びに北緯二十七度以南の南西諸島（大東諸島を含む。）

二 壠婦岩の南の南方諸島（小笠原群島、西之島及び火山列島をいう。）

三 沖の鳥島及び南鳥



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 覚
2019/3/18



南方同胞援護会理事会。左から渋谷敬三会長
吉田事務局長、淵上房太郎副会長 （昭和34年
1月21日）



土地問題座談会。左端。右から高岡大輔氏、
洲上房太郎氏、桑江朝幸氏（昭和33年12月1日）



宮森小学校ジェット機墜落事故打合せ会。中央
(昭和34年7月3日)



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村寛
2019/3/18

熱血トリオの縦横の活躍

昭和二十七年初秋のある日の昼下がりに、南方連絡事務局第二課の私の部屋に、目の鋭い四人の若者が突然大きな箱二つを持って現れた。彼らは真剣な眼差しで依頼した。

「吉田さん、なんとしてもこの箱の中の日の丸を沖縄の小中学校に送ってほしいのです」

この言葉を聞いて私は言った。

「君たちはいま沖縄がどんな地位に置かれているか知っているのか」

彼らはすかさず答えた。

「僕たちはそれを知っているが故に、どうしても日の丸を贈ってやりたいのです。八方手を尽くし、どうにかして贈ろうと奔走してみたのですが、どこへ行ってもダメだと断られ、ある人からもしかしたら吉田さんに頼んでみてはといわれたので、是非ともお願いします」

青年たちの瞳は私の心を奪って放さなかった。一瞬私の脳裏を不安の影がよぎったが、遂に青年たちの熱意に押され引受けてしまった。引受けたものの平和条約がようやく批准発効したと同時に沖縄が米施政権下に置かれることが明確化された時期だけに、いかにすべきかに悩んだ。

しかし青年たちのあの熱い眼差しが焼きついて離れなかった。私は決意した。断崖から目をつぶって飛び下りる覚悟を固め、あらゆる手段を講じ苦心惨憺して数カ月後ようやく現地に送り届けることに成功した。私は、これが縁で日本健青会なるものを知り、そのリーダーが末次一郎であることを知った。彼はこれを機に、昭和三十九年初めごろから私の所へ足を運んで、沖縄に関するいろいろの問題を持ち込み始めた。

彼の唐突ともいえる行動に私は戸惑い、彼を知るマスコミ関係者は

「彼は右翼だからあまり接触しない方がよい」

と耳打ちした。だが、ある社会党議員が竹下登議員に

「末次一郎とはどういう人物か」

と問われ、

「彼は国家の大事なことで取り残したことがないか、ということを常にキャッチし、それに全力を東急する男だ」

と答えたという。

私はこれを聞き、まさに彼は「沖縄問題」に全力投球しようとしていることを知った。私は彼の行動と熱意をかって、昭和四十年九月南方同胞援護会評議員に推挙、彼の目ざましい舞台裏の活躍が始まった。

(吉田嗣延著「小さな闘いの日々」P171～P172)

末次一郎氏の語る吉田嗣延

■末次一郎

あちこち手を尽した時に、私の事務所の若いのが、総理府南方連絡事務局に相談に行った時、応対したのが吉田さんです。吉田さんはああいう性格ですから「そりゃいいこっちゃ、オレにまかせろ」という調子でうちの若いのが意気統合した。それで「エライ役人がいますよ、一遍会って下さい」といって僕を引っ張って行ったのが初対面なんです。

■宇山厚

私は吉田に会うたびに、沖縄に対する彼の情熱に感心したのだけれど、やっぱり末次さんのような人がいたんだねえ 当時周囲から「お前そんなことやめた方がいいぞ。」と言われるながら沖縄に夢中になったのは嗣延の情熱のせいですよ。

■末次一郎

いや、そこから腐れ縁が最後まで続くわけです。二十七年に南方連絡事務局ができた頃になると、教育分野や福祉分野ではある種の交流が始まるのです。年を追って盛んになってくるのをみて、自民党に「沖縄問題特別委員会」ができ、野村吉三郎さんが委員長でした。そこで種々論議して、政府がダイレクトにやれないからワンクッション置こうというので作られたのが南方同胞援護会です。この設置には真向から反対したのです。「なんでワンクッション置くのだ、堂々と政府がやれ」と散々やっただけど、その時の相手には吉田さんは出てこないのです。彼は現場をやっていましたから。まあ考えてみればワンクッションというのは一つの知恵ではあったわけです。それで結局南方同胞援護会ができた時、ここを切り盛りするのは吉田しかいないとなるわけです。そこで吉田さんは役所を辞めるのですが、お嬢さんたちに聞くと、その頃非常に懊悩しておったというのです。私の推測で、お嬢さんたちとたまたま意見が一致するのですが、役人を辞めることに彼は非常に気を使っただけです。後年僕は吉田さんに「あんた生半可に役所の飯を食うたから、役人コンプレックスがあっつかん。役人をなんで怖がるのだ」といって僕は年中ケンカしたのです。というのは彼は役所を知っているから、気を使いすぎるのです。僕は元々浪人ですから「何を言っているのだ」といってかなり議論したり、ケンカしたりしながら事を進めたのです。しかし、そういうことを思うと南援に出た時の彼の心境は分からないわけでもないなあ、この間お嬢さんと話したんですよ。

平成元年十一月一日

(「回想吉田嗣延」(座談会 吉田氏を語る)P11～P12)



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan



安井謙総務長官に対する「五人有志の会」の主席公選等実現方要請。右端。左から上地一史沖縄タイムス社長、安井謙長官、屋良朝苗教職員会長、池宮城秀意琉球新報社長（昭和40年10月13日）



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18



座談会「沖縄のビジョン」。右端。左から山野幸吉特別地域連絡局長、塚原俊郎総務
長官、大浜信泉南方同胞援護会長（昭和41年12月）



講和前補償問題の解決後、ヘンメン
デンガー弁護士が来日(右端)、
歓迎会。左端 (昭和42年)

屋良朝苗氏との絆

沖縄県民の米軍基地から生ずるもろもろの基地公害に対する不安と不満は、同年（昭和43年）十一月十九日未明に起きた嘉手納基地でのB 52の大爆発を契機 一気に爆発した。沖縄県労協など百三十九団体は「いのちを守る県民共闘会議」を結成し、B 52撤去その他を要求して昭和44年2月4日、ゼネスト決行を決定、沖縄は不穏な空気に包まれたまま昭和43が暮れた。

暗い幕開けとなった昭利四十四年1月中旬のある日、けたたましく机上の直通電話が鳴った。受話器を取ると、沖縄にいる高瀬大使からであった。大使は沖縄の不穏な状況説明のあと、

「ゼネストは絶体回避しなければ、せっかく軌道に乗った沖縄返還交渉は後退する恐れが生ずるので、是非君に沖縄へ来て協力してもらいたい」

というのである。私は、

「もし政府から正式に要求があれば行ってもよい」

と返事した。その数日後、末次総理府総務長官から 正式要請があり、私は沖縄へ飛ぶ結果となった。

ゼネストに対する現地の動きは私もあらゆる角度から分析し、是非とも回避させねばならないと判断していた時だけに、その背後にある米軍の動きが非常に気掛りであった。

一方、京都では、沖縄の基地のあるべき姿を極東の平和と日本の安全の確保の観点から討議するための「沖縄およびアジアに関する日米京都会議」がまさに開かれようとしていた。小笠原返還の際にも苦い経験をしたが、米軍関係者の中には、沖縄の施政権返還が日米交渉の舞台に上がってからはスキあらば、交渉を遅らせようという動きがあることを知っていただけに、沖縄現地でのゼネスト決定は私の胸中にいつも鉛のように重苦しくのしかかっていた。

京都会議が沖縄行きか二者択一を迫られた私は、熟慮の末。京都会議は末次一郎に氏に頼み、後ろ髪をゼネストを直前に控えて混沌とした沖縄で私がみたものは、県民の不安と不満をよそに米軍は、着々とゼネスト対応策を進め完全な防備態勢を整えていた。彼らはむしろゼネスト決行を期待しているかのような印象さえうけたのである。これらな感じとった私は、昼夜をわかつ屋良主席をはじめ亀甲康吉県労協委員長ら関係者を回って、

「米軍の挑発に乗ってはならぬ。彼らに口実を与え、沖縄返還が遅れることになったらまさに彼らの思うツボである」

と説得を続けた。私は必死に奔走した。屋良主席は一月三十一日

「忍び難きを忍びゼネストを回避してほしい」

と県民に向け声明、得るものより失うものの大きかったゼネスト決行は危機一髪のところであ

回避された。
この日、私は高瀬大使と

「とうとうやり通しましたね」

と堅い握手を交わし、お互いに通じあう手の温もりを確かめ合った。

この足で屋良主席を訪ねた。主席は静かな表情で

「ゼネストが回避できてホッとしたが、亀甲君らには気の毒なことをした。彼らに付きた」

とぼつり、複雑な表情を見せた。

（吉田嗣延著「小さな闘いの日々」P208～P210）

吉田嗣延氏と私の交りは五十年以上にもなる。そのあまりにも長期のために、あるいは、奇異の感を抱く人があるかもしれない、しかし事実である。私がまだ若くして沖縄師範学校に在学中、大正十三年の二学期から翌十四年の三月卒業まで、私は幸いに吉田氏のお宅に下宿させてもらっていた。そして吉田氏のお父様、お母様に特別にお世話になった。そこに当時の県立一中の下級生の男の子がいた。その子の名が吉田嗣延。いま、彼は正義を尊び剛毅にして実直の士であるが、そのときは純真可憐な少年だった。しかし、吉田氏と私との真の心の交友は終戦後に急速に深まった。氏は東京に私沖縄にあって、苦難の底に沈潜していた。占領下の沖縄のために、ともに全精魂を投入しあっていたが、その責務と立場はちがっていても、沖縄を思う心情だけは互いに通じあっていた。私が知事になってからも、私は彼の存在を常に心に置いていた。至難の問題に逢着して、その進退に迷うとき私は遠く東京にいる彼を想った。時としては直接彼を訪れて、その助言をもとめたこともあった。常に私の立場について理解も早く意見も適切であった。

彼は沖縄が嘗胆した戦後三十年の苦難の日々を、最もよく体得している者である。彼こそは、まさしく沖縄の嘗めた悲痛を後世に伝えるべき、数少ない生きた証人の一人である。

その証言が、こんど一冊の本となって上梓されることになった。戦後三十年間、沖縄の苦難を身をもって体験した人々に、そしてまた、これからの沖縄の真の自立を願う人々に、戦後沖縄史の最も適切な記録として、自信をもって敢てこの一書を推薦したい。

昭和五十一年七月（吉田嗣延著「小さな闘いの日々」P1～P2）



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛
2019/3/18

南方同胞援護会機関誌

季刊

沖縄

特集 尖閣列島

特出厳禁



第56号



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村寛
2019/3/18

嵐の中の返還協定調印祝賀会

世界外交史上初めてといわれる宇宙中継で、両国内のテレビに放映される「沖縄返還協定調印の行われる首相官邸は、まるで狂乱する怒濤の中の小舟のような印象すら与えた。すぐ近くにこに石ころや板切れなどが散乱し、デモ隊と機動隊の衝突の跡をとどめていた。すぐ近くにあるわが事務所は異様な熱気と興奮の渦の中に包まれ、仕事は全く手につかぬまま時は流れていた。

こんな状態で、はたして何人が今夜の祝賀会に集まるだろう。どんな顔ぶれだろう。とりとめもないことを思いめぐらしているうちに午後五時"沖縄復帰の父"仲吉良光氏がとよ夫人に付き添われてやってきた。八十四歳とは思えぬ氏の眼光是鋭く、

「こんな祝福すべき日にあれはなんだ!」

と一喝、どうも、もののものしい事務所周辺の警備に怒っている様子。しっかりした足どりで部屋に入るなり、つづいて東京沖縄県人会会長の神山政良氏が"個人の資格"でやってきた。

1つしかない白黒テレビを会議室に移し、ポツポツやってくる沖縄出身者や関係者、そして北方関係者、小笠原関係者、午後七時には約八十人余が集まった。その前後からけたたましくサイレンを鳴らして走る警官隊の装甲車の動きが活発となった。テレビからは刻々とデモ隊と警官隊衝突のニュースが流れた。それぞれの苦しかった過去への思い出話にひたっていた一同の中から、溜息ともつかぬどよめきが、おこったがすぐに消えた。

午後八時、淵上房太郎南援副会長のあいさつで祝賀会ははじまり、テレビを見守りながら出席者が思い思いに祝詞を述べた。上京中この祝賀会に出席した東江誠忠沖縄赤十字社副社長は

「晴れて沖縄返還協定が調印にまでこぎつけたことは、沖縄県民百万のみならず、南援のみなみならぬ蔭の努力と勇断、そして全国民をはじめ関係者の深い理解と支援があったからだと思う。今後は、タブーに等しかった“沖縄返還”のことばが名実ともに実現できることになった経過をよくかみしめ、よりよき沖縄県づくりをじっくり考えねばならない責務を、私たちは同時に負うことになった。日本中でただ一つのこの祝賀会は大変感銘深いものがある」

と語った。

午後九時、予定通り始まった調印式に一同の目差しは集まった。日米双方の調印が終った瞬間、仲吉老人は顔をくしゃくしゃにさせ、両手を高々と挙げ、不自由な喉をふりしぼって「万歳々々」と絶叫、一同もつられて口々に万歳を三唱した。老人の目ばかりではない、集まった人々の目に涙が光っていた。暗の中の灯台が嵐の海を照らすにも似たような、小さいながらも心強い祝賀会だった。

(吉田嗣延著「小さな闘いの日々」P236～P239)

吉田嗣延の昭和47年5月15日

昭和47年5月15日、私は沖縄県の最南端「波照間島」で復帰の朝を迎えた。午前5時に起床した私は、部落から盗難たん約二キロの所に、全国の青年代表が復帰記念に建立した「波照間之の碑」へと足を向けた。

(中略)

同碑建立の発端となったのは、私が去る46年7月、4ヵ月にわたる日照り続きに見舞われて飲料水も底をついている宮古、八重山地方の視察に行った際、瀬戸弘竹富町長から「復帰記念に是非、何か建ててほしい」との要請を受けた。干ばつ救援活動でたまたま同席していた日本青年奉仕協会から派遣された青年たちに、

「何か沖縄復帰記念にふさわしい意義あるものはないかなあ」と話を持ちかけてみた。私は彼らがすでに波照間島で干ばつ救援活動を終えて帰京途中であることをふと思い起こし、「君たち若い諸君の手で、沖縄最南端の地、波照間島に記念碑をつくっては」と切り出すと、青年たちは一瞬ハッとしたかと思うと目が輝き、異口同音に「そうでした、僕たち大いに賛成です。他の各青年団体にも呼びかけ、是非われわれの手で建てたいですね」と興奮した様子である。

この話は情熱あれる青年たちの手で着々とす目られ、さらに青年たちのはついて書く都道府県の石が集められて、ここで実現したのである。主碑「波照間之碑」は、大濱南援会長に揮毫を依頼し、副碑にはつぎの碑文を刻んだ。

この碑は沖縄の祖国への復帰に際し 全国の青年が各地の石を持ちより
ここ"はてるま"の地に精魂を注いで建設されました
この1つ1つの石が わが国の礎となり沖縄の新たな出発となることを念じて

午前9時、いよいよ「波照間之碑」の除幕式である。危ぶまれた天候もすっかり晴れ上がり、南国の日差しがさんさんと降り注ぐ仲で式次第は進んだ。同じ日東京・武道館では、天皇皇后両陛下をお迎えし、佐藤総理をはじめ約1万人が参加して歴史的沖縄県祖国復帰式典が、また、那覇市民会館では、政府代表に山中総務長官が出席して晴れやかに復帰式典が開催された。

内閣復帰式典委員会の唯一の唯一の民間代表委員だった私が、この南海の孤島波照間で、素朴な村人たちや青年たちと万感込めて、静かな復帰記念式典を行ったのは、生来臍曲りののなせる業か。

(吉田嗣延著「小さな闘いの日々」P244～P247)



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18

37

沖縄返還協定調印の日。中央
(昭和46年6月17日)



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 覚
2019/3/18



復帰の日の前日、波照間小中学校児童・生徒
に復帰記念品を渡す（昭和47年5月14日）



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18



復帰記念に全国の青年代表とともに汗して
「波照間の碑」を建立。復帰の日除幕式を行
なう。左は青年代表森田義則氏と最後の碑
文をはめ込む（昭和47年5月14日）

三国一朗氏司会による東京12チャンネル
「私の昭和史」放映。右端。左から三国氏、
沖縄復帰運動にともに全精力をつくした
仲吉良光氏ととよ夫人（昭和47年）





大浜会長と最後の座談会となつた「新春放談」。左端。左から島袋数也琉球新報記者、大浜会長、当銘正興沖縄タイムス記者

(昭和50年12月10日)



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18



著書「小さな闘いの日々」出版祝賀会。新崎盛敏氏から
祝辞を受ける（昭和51年9月2日）



石垣市の文化講演会で竹富島を訪ねる。左から
3人目。右から比嘉氏、茅誠司会長、瀬戸弘竹
富町長、茅伊登子夫人、前列上勢頭亨喜宝院館
長、左に末次一郎氏、下田正夫氏
(昭和51年10月11日)



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村寛
2019/3/18

総理大臣として初めて祈
念堂参観の鈴木総理の説
明役。左から3人目。左
へ鈴木総理、茅会長
(昭和56年9月15日)



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 覚
2019/3/18

「本土・沖縄豆記者交歓20周年記念の集い」に
会長として皇太子ご夫妻を迎える。左から3人
目（昭和57年6月12日）



祈念堂へ皇太子ご夫妻初めてのご参観に
先導役としてご案内。左端。ご熱心に祈
念像や西村計雄画伯の「戦争と平和」をご
覧になる（昭和58年7月12日）



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 覚
2019/3/18



最後の座談会となった「沖縄の未来像を探る」。左端。右へ宮城弘岩氏、桜井溥氏、若井康彦氏（昭和60年12月1日）



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/3/18



3年4カ月の闘病のあと、平成元年
5月10日死去。78歳。目黒区正覚寺
内実相会館で行われた告別式には、
雨の中、八百人が参列した
(平成元年5月12日)

右から実弟嗣義氏、新崎盛暉氏、同恵子さん(2女)、吉田寿子さん、
長男創氏、善子夫人、船戸明子さん(長女)、同史郎氏、岩崎敬子さん
(3女)、同毅氏